

Departure OC I Revised Edition

パラダイムシフトに対応した改訂版 Departure

吉田健三



1. 英語教育のパラダイムシフト

1月21日、2006年度大学入試センター試験で初めてリスニングテストが実施されました。公平な受験環境の保障といった物理的な問題が壁となっており、長期間実現が難航していたテストですが、近隣諸国の韓国や中国と比べると大きく出遅れた感はありません。ともあれ、日本の英語教育が一歩前へシフトした意義は大きいと言えます。

このようなパラダイムシフトに向け、現場での取り組みにも変化が見られます。1月7日付読売新聞は、大阪府立北野高校でのリスニング指導を紹介しています。「従来2年次からは入試に向けた英訳や文法の指導が中心だったところ、現在の3年生以降は2、3年次の通常の授業でもリスニングに力を入れることにした」という内容でした。現場での「温度差」は個々に多少あるかもしれませんが、音声指導を軽視できなくなったという認識は共通しているのではないのでしょうか。

2. リスニング重視へのシフト

現行版 *Departure OC I* は、高校生の知的好奇心を刺激するテーマを織り込み、「情報や相手の意向などを理解したり」「自分の考えなどを表現したり」する能力、つまり、総合的な実践的コミュニケーション能力の養成を編集方針としました。今回の改訂では、この基本コンセプトを継承しつつ、音声指導やコミュニケーション活動をより重視したモデルチェンジを行いました。

Pronunciation Skills では、単音や連音などの発音のスキルをよりわかりやすく記述しまし

た。それぞれの発音のスキルは Ready? で基本練習をした後、Go! の自然な会話の中で応用学習ができます。スキル学習ができる語や句は、会話文の中でカラーの★印で示されており、現行版に比べより明確になりました。

発音のスキルの記述例：“on” の ‘n’ は舌の先を上歯の歯ぐきにつけ、「ヌ」のように、“long” の ‘ng’ は「ハンコ」の「ン」のように発音します（7課）。“could you” のような表現では前の単語の語尾と次の単語の最初の音がいっしょになって「ジュ」と発音されます（11課）。

さらに大きなシフトは、リスニング・ストラテジーの学習を盛り込んだ点です。背景知識を活用する「知識ストラテジー」、場面から相手の発話内容を推測する「場面ストラテジー」、文脈をヒントにした「文脈ストラテジー」、話の主題にかかわる重要語句をヒントにする「キーワード・ストラテジー」、イラストや画像から内容を推測する「視覚ストラテジー」、知りたい情報だけを探しながら聞く「スキニング」、要点だけを絞って大意をつかむ「スキミング」。これら7つのリスニング・ストラテジーが、1課～16課および Listen Up! ①～④で学習できるように工夫されています。

Listen Up! ①～④は、オーセンティックな英語を聞き取る活動です。①インタビュー、②留守番電話、③ラジオで放送された公共広告、④ラジオのニュース、を内容としたまとまりのある英文を聞きます。各 Unit の末尾にある Listen Up! の直前には、センター試験リスニングテストだけでなく、TOEFL、TOEIC、英検の基礎練習にも

なる Listening Challenge があります。

筆者には経験的に、筆記試験とリスニングテストの成績との相関はあまり高くないという印象があります。実際、本校生徒1年次～3年次の実力考査をデータとし、両者（筆記12回、リスニング5回）の相関係数を算出したところ、すべてほぼ同じ数値で、0.5前後（弱い相関関係）しか認められませんでした。この現象は何故起きるのでしょうか。発音指導は行っている、ストラテジーの指導はほぼ皆無だったことが原因のひとつと考えられます。筆記試験が苦手でも普段英語の音声をよく聞いている生徒は、リスニングを得意としている場合があります。そういった生徒は、発音のスキルに加えリスニング・ストラテジーを独学で、ある程度身につけているのでしょう。他方、逆のケースの生徒も少なくなく、その結果が先の相関係数に表れているものと推察されます。

体系的なリスニング・ストラテジー学習の導入は、英語学習の偏りを矯正し、実践的コミュニケーション能力の育成へと大きくシフトさせるにちがいない、と筆者自身期待しています。

3. 「使える文法」へのシフト

各課ごとに3つの重要表現と1つの文法項目を Function & Grammar にまとめ、それらを使用したり、聞き取ったりするコミュニケーション活動を、随所に盛り込みました。

文法項目は、機能文法の観点から「使える文法」つまりコミュニケーション文法として提示しています。たとえば、「Class sizes are small. と Class sizes are smaller. はどう違うのでしょうか。」（2課）。単なる「文法」として比較級の知識をもっている、「smaller」の場合は、会話の流れから何と対比しているかを理解する必要があります。絶対数が少ない場合の“small”とは意味が異なると判断しなければなりません。また、「That sounds good. は That's good. とどう違うのですか。」（14課）はどうでしょうか。“That's

good.”は、過去の事実（例：He came to visit me last week.）や相手の申し出（例：I'll meet you at two tomorrow.）に対して、「それはいい。」とか「わかった。いいよ。」という満足や承認を伝える表現です。sound は「～のように思われる」の意味で、“That sounds good.”は、提案や勧誘（例：Let's go watch the soccer game tonight.）の応答として、「いいね。」という話し手の印象や意見を表します。「文法」の知識として、どちらも SVC の文型だとわかったり、ただ日本語訳ができるだけでは「使える文法」にはなりません。改訂版では上述のような quiz 形式でこのコミュニケーション文法の観点を盛り込み、*Teacher's Manual* で具体的な解説を行っています。

4. 一歩進んだ OC へのシフト

現場では依然として「たかが OC」といった発想はありませんか。「OC の授業では表現の定着は重視せず、ただ楽しく英語を使えばいい」「OC の学習は入試に役立たない」といった声が一部でまだ聞かれるようです。*Departure* ではそうした発想を変えるための工夫も行っています。

Departure OC I では、『学習ノート』『評価問題集』で学習内容の定着を図っています。ご使用の現場の先生から「『学習ノート』はいいですね。OC では予習や復習がさせにくいので、このようなノートがあると、生徒だけでなく、私たちも安心して授業がすすめられます。」という評価をいただき、これらは改訂版でも継続されます。

さらに、大修館ウェブサイト (<http://www.tai-shukan.co.jp/gcdroom/>) で、各課のテーマや表現が大学入試でどのように出題されているのかを紹介しています。*Departure* の活動が驚くほど入試にも役立つことを認識していただければ幸いです。

新 *Departure* は OC の授業を一歩先へシフトします!!

（よしだ けんぞう・兵庫県立神戸高等学校教諭）